

第三共和政下フランスの学校教育プロパガンダにおける啓蒙思想家像 (3)

—— (翻訳・解題) ビュイッソン編『教育学・初等教育事典』

項目「ドルバック」、「ラ・メトリ」——

Le mirage des philosophes des Lumières dans la propagande politique

pour l'instruction publique sous la III^e République (3) :

(traduction et commentaire) articles « Holbach (D') » et « La Mettrie »

parus dans le *Dictionnaire de pédagogie et d'instruction primaire* de Ferdinand Buisson辻和希・吉野敦¹・杉山大幹²・坂倉裕治³

TSUJI Kazuki, YOSHINO Atsushi, SUGIYAMA Daiki, SAKAKURA Yuji

本稿は、第三共和政下のフランスで、フェルディナン・ビュイッソンが編纂した『教育学・初等教育事典』の項目「ドルバック」、「ラ・メトリ」を訳出したものである。同事典は、第三共和政下で体系的組織化が進められていた公教育に関して、政権がおすすめる方向性を示した象徴的な著作である。その内容には、こんにちから見れば、必ずしも正当な評価とは言えないものも混在し、項目執筆者が当時のフランスが直面していた課題を反映した上で「思想の領有 (appropriation)」を行なったことが垣間見える。項目「ドルバック」、「ラ・メトリ」もその一例とみなすことができる。

キーワード：ドルバック、ラ・メトリ、唯物論、ビュイッソン、第三共和政

【解題】

学校教育の体系的組織化が進められた第三共和政下のフランスで、フェルディナン・ビュイッソン (Ferdinand Buisson, 1841-1932) が編纂した『教育学・初等教育事典』(*Dictionnaire de pédagogie et d'instruction primaire*, 4 vol., Paris : Hachette, 1882-87. 以下『事典』と略記) は、政権が押し進める公教育の方向性を示す象徴の役割を担った¹⁾。理論編の第一部と実践編の第二部に分かれたれ、それぞれが細かな活字で組まれた2巻からなる、合計4巻の浩瀚な事典である。今回訳出する項目「ドルバック」と「ラ・メトリ」は、いずれも第一部の第2巻に掲載されている。両者とも、項目の末尾に執筆者としてデュメニル (Georges Dumesnil, 1855-1916) の署名がある²⁾。

ドルバック (Paul Henri Thiry, baron d'Holbach, 1723-89) は、神聖ローマ帝国バーデン辺境伯領³⁾のエーデスハイムに生まれ、フランスに帰化した哲学者である。ライデン大学で自然科学を学び、ドイツの化学書をフランス語に翻訳した。パリに戻ると、まだ無名であった頃のディドロ (Denis Diderot, 1713-84)、グリム (Frédéric Melchior, baron de Grimm, 1723-1807)、ルソー (Jean-Jacques Rousseau, 1712-78) などと親交を深めた。ディドロ、ダランベール編『百科全書』には、化学、

1 大分大学 教育学部 准教授

2 常磐大学 人間科学部 助教

3 早稲田大学 教育・総合科学学術院 教授

地質学などの領域にかかわる多数の項目を寄稿した。財力にものをいわせて、パリの邸宅と近郊の別荘では百科全書派の知識人たちが集まるサロンを開催した。

ホッブズ (Thomas Hobbes, 1588-1679)、ロック (John Locke, 1632-1704)、シャフツベリ (Anthony Ashley Cooper, 3rd Earl of Shaftesbury, 1671-1713) など、英国の哲学者たちに関心を寄せる一方、コンディヤック (Etienne Bonnot de Condillac, 1714-80) の感覚論哲学に学び、唯物論的無神論の立場から、社会秩序をいかに確立するかを論じた。隠れ蓑として 1760 年に死没したミラボー (Jean-Baptiste de Mirabaud, 1675-1760) の名を記して出版した主著『自然の体系』 (*Système de la nature*, 1770 年) では、唯物論的自然観、人間論を基盤とした、徹底した無神論が展開され、人間の道徳的行為の動機である愛情、憎悪、利己心さえも、それぞれ物理学の引力、斥力、慣性との類比によって機械的に説明されている。人間を一種の自動人形とみなし、人間の意志や知的能力までも、物理的・自然科学的な方法で説明できるとする立場からは、人間の行動も周囲の状況 (刺激) によって引き起こされた結果とみなされ、自由意志の存在は否定される。このような徹底した唯物論の立場から、神の存在も完全に否定された。同書は高等法院によって焚書とされた。このほかに、『キリスト教暴露』 (1767 年)、『神聖伝染』 (1768 年)、『ウジェニーあての手紙』 (1768 年) など、匿名ないし偽名をもちいて、容赦のない激しいキリスト教批判文書を次々に世に投じていった。ドルバックによれば、人間をつき動かす原動力と目された利己心、利害心も、社会環境と立法のあり方によって決定される。ここに、教育 (適切な環境の整備) の問題についても考察する必然性があった。

『事典』の項目「ドルバック」では、あまりにも平板な思想の通俗的理解によって、まるで凡庸きわまりない思想家であったかのように紹介されている。教育理論の発展に果たした役割がほとんどなかったかのように扱っているのは不当であろう。項目執筆者デュメニルの関心は、公教育と家庭教育のどちらかに排他的に教育の役割を委ねられるのではなく、両者間で適切な役割分担があること、公教育については教会ではなく国家、政府が主たる責任を持つべきであるという認識にあったようである。思想家の著作にあつては周縁的な言説ばかりを引用し、思想家がもっとも力を込めて展開したカトリック教会の害悪を告発する議論については、ほとんど完全に沈黙している。その一方で、女子教育に関するドルバックの考察に関しては、多少なりとも評価しているのが目を引く。第三共和政期のフランスでは、女性の就学率を改善することが喫緊の課題の一つであった。項目執筆者が直面していた課題を反映した「思想の領有」の一例とみなすことができよう。

ラ・メトリ (Julien Offray de La Mettrie, 1709-51) は、織物の取り引きで成功した商人の息子としてブルターニュ地方サン＝マロで生まれた。カーンとパリのコレージュで学び、1733 年ランス大学で医学博士の学位を取得、オランダにわたり、ライデン大学でブールハーフェ (Hermann Boerhaave, 1668-1738) に学んだ。1742 年、フランス衛兵隊⁴⁾ 付き軍医となり、フランドルでの戦闘に従軍した。1745 年に唯物論的立場を表明した著書『魂の自然誌』を刊行したことを咎められ、軍医の職を解かれた。1748 年、さらに自説を深めた『人間機械論』を著し、人間の思考といわれるものは脳髄や神経組織が生み出すものだとして主張し、人間は機械であると断言して、デカルトの心身二元論を退けた。激しい論難を招き、身の危険を感じたラ・メトリは 1748 年、プロイセンのフリードリヒ大王 (Friedrich II, 1712-86, 在位 1740-86) のもとに亡命し、ベルリン・アカデミー

の会員⁵⁾、国王付き朗読係として啓蒙専制君主の寵愛を受けた。医学領域での著書に『眩暈論』、『天然痘論』、『喘息論』などがあり、哲学領域の著作に『人間植物論』、『機械以上の人間』、『反セネカ論、あるいは幸福論』、『エピクロスの説』、『音楽論』などがある。

項目「ラ・メトリ」で与えられている評価には議論の余地が大いにある。ラ・メトリは主著『人間機械論』において、教育をまったく与えられなかったならば、人間は動物に遥かに及ばない存在になってしまうだろうと論じることで、「教育の奇蹟」を讃えている⁶⁾。奇妙なことに、本項目ではこの点についてまったく触れられていない。思考、判断力などの精神活動をも含め、人間はまったく機械的な存在であるとする『人間機械論』で参照される医学を中心とした知識は、たしかにこんにちの目から見れば、限定的なものといわざるをえない。当時、脳や神経系に関する知見は限られていたし、「人間という機械」のしくみを説明する際に援用される具体例は、当時注目されていた自動人形や時計から発想を得たものであった。しかし、キリスト教会の権威に衝撃的な攻撃を加えたその論は、フランス啓蒙思想の一つの重要な潮流と目される唯物論哲学に決定的な基盤を与えたのである。

注

- 1) ユイッソン、『事典』については、次の解題を参照。坂倉裕治、杉山大幹、吉野敦、吉田陽「第三共和政下フランスの学校教育プロパガンダにおける啓蒙思想家像 (1) — (翻訳・解題) ユイッソン編『教育学・初等教育事典』項目「コンディヤック」および「ディドロ」 —」『早稲田大学大学院教育学紀要』第32号、2022年3月。
- 2) デュメニルについては、次の解題を参照。杉山大幹、辻和希、坂倉裕治「第三共和政下フランスの学校教育プロパガンダにおける啓蒙思想家像 (2) — (翻訳・解題) ユイッソン編『教育学・初等教育事典』項目「エルヴェシウス」 —」『学術研究 (人文科学・社会科学編)』早稲田大学教育学部、第70号、2022年3月。
- 3) 12世紀にツェーリング (Zähring) 家の支配下で成立したバーデン辺境伯領は、中世期には相続問題から分割や併合を繰り返していたが、18世紀にあらためて辺境伯領として再統合され、ナポレオン戦争時には領土を拡大して、1803年には選帝権を獲得した。1806年、神聖ローマ帝国が解体すると、大公国として独立した。
- 4) 近衛隊、銃士隊 (デュマの戯曲『三銃士』で知られる) などとならんで、フランス国王直轄軍を構成する陸戦部隊。入隊することは大変な名誉とされたが、平民出身者が多いこの部隊は、一度戦闘となれば激しい損耗に曝された。革命前夜には国王直轄軍のなかにあつて早い段階で離反者を出し、そのなかには、バースティユ牢獄襲撃で大きな役割を演じ、国民衛兵隊の母体となった者たちがいた。
- 5) 1700年、ライプニッツ (Gottfried Wilhelm Leibniz, 1646-1716) によって創設された同アカデミーは、18世紀中葉には、ロンドンの王立協会やパリの科学アカデミーなどの影に隠れ、ヨーロッパの知識人たちの間で威光を失っていた。フリードリヒ2世は、1746年、フランスの哲学者モーペルチュイ (Pierre Louis Moreau de Maupertuis, 1698-1759) を院長に迎えて同アカデミーの再編に着手した。
- 6) さしあたり、次を参照。坂倉裕治「18世紀フランスにおける「聾啞者」へのまなざしの思想

史的意味』『フランス教育学会紀要』第18号、2006年9月、11～12頁。辻和希「デカルト動物機械論に対するブージャンの嘲笑」『フランス教育学会紀要』第35号、2023年9月、72～73頁。

〔翻訳〕

ドルバック ポール＝アンリ・ティリ・ドルバック男爵は、1723年に選帝侯領エーデスハイムに生まれた。パリで育ち、1789年に没するまで生涯をこの地で過ごした。大変な資産家で、そのおかげで、人知れず慈善事業にかかわるのとならんで、気前よく贅沢三昧に身を委ねることができた。ドルバックの館には、当代の哲学者たちがこぞって集まった。供された食事といったら、この館の持ち主をして「哲学の給仕長」などと戯れに呼ばせるほどのものだった。ドルバックは、学術的協力者として『百科全書』に数多くの項目を寄稿した¹⁾。また、学問の発展や宣伝に役に立つと判断した外国作品をフランス語に翻訳し、出版した。さらに、批判的な哲学書も、たいていは偽名を用いて世に投じた。そこで展開されるキリスト教批判は大胆にも程があるもので、自らの学説の基盤である無神論と唯物論に基づいて社会の体系を導き出そうと努めている。

ドルバックの形而上学的見解のでたらめな独断には驚かせられるのももっともなのだが、その見解がどのようなものであれ、その道徳学、政治学の構想にあって出発点にあったのは、人間を『自然の体系』（これはドルバックの主著のタイトルである）の一部とする思想である。そこから、人間自身が構成要素となっている自然環境をなりたたせている諸事実や諸法則に人間を近づけることが適切だと考えるに至った。その結果、近代教育学の主要な真理のいくつかと向き合うことになった。

なによりもまず、ドルバックはよい教育の重要性を認めて、これを強く主張している（『普遍的道徳』アムステルダム、マルク＝ミシェル・レイ書店、1776年、著者名欠、第1巻52頁²⁾）。ドルバックは孔子から引用している。「犯罪を罰する配慮を避けるために、犯罪を防止する配慮に心をくだきなさい」〔第3巻111頁³⁾〕。しかし、エルヴェシウス⁴⁾よりも賢明であったドルバックは、教育的活動の限界についてもしつかりと見定めていた。人間たちに対してあらゆることが可能であるなどとは信じていなかった。経験から学んだことは、それとは正反対であることが明々白々であった（58頁〔対応する記述は、『普遍的道徳』第二巻53頁にみえ、転記ミスか誤植と推測される〕）。

まずは身体から教育が始められなければならない。幼子について、この点に十分な注意が払われていないのが常である。子どもはまったく善なものとして生まれるのではない。そのようなことを、絵空事の体系が必要だというために、ルソーは主張したのであるが⁵⁾。幼子はむしろ厄介な存在というべきだろう。それゆえ、教育とは「その家族や祖国にとって有用で都合がよい人間となるように、また子どもたち自身が幸福を自ら手に入れられるように、子どもたちを矯正し、陶冶し、知識を与える技術」である（同書、〔第3巻、〕53頁、教育に関する章）。

このように示された目的を達成するために、教育は一連の実験となるにちがいないまい（同書、〔第3巻、〕69頁）。この点に関しては、心の教育という本来の意味での教育に関しても、純粹な

知育についても、同様に真実である。常に、心に関することから教育が始められなければなるまい（〔第3巻、〕83頁）。しかし、この点で成功するには、権威ばかりが誇示され、自動人形をつくるだけの、高圧的で隷属的な旧来のやり方を手放さなければならない（〔第3巻、〕79頁）。正反対に、よい教師たる者は権威を和らげるように推奨される。もし教師たちがこれを大胆にも試みるならば見出すであろう。「理屈がしっかりと提示されたならば、このうえなく幼い子どもでも言い聞かせることができること、子どもたちをまったくの機械にすることしかししない、やる気を出させない命令などよりも理屈の方がはるかに納得させるのに適していることを〔…〕。なんども繰り返し罰を与えても、魂を卑しくし、名誉の感情を欠いた嘘つきを作り出すだけである。罰にも慣れっこになれば、なんら効果がなくなってしまう」〔第3巻、96-97頁〕。むしろ、常に喜びの感覚と結びついた道德の観念を示す方がよかろう（同書、〔第1巻、〕50頁）。この方法によって、他の知識や大人の習慣と同じように、子どもたちは実体験を通じて徳を自ら学ぶ新しい教育が実現する（〔第3巻、〕73頁）。

ドルバックは、エルヴェシウスやこの世紀の他のユートピアを夢見る人たちのように専ら公教育を支持したわけではないし、また、ルソーのように反社会的な孤立をかたくなに擁護したわけでもなかった。ドルバックはいかなる極端も追い求めなかった。ドルバックによれば、すべての人間が同じ教育を受け入れられるわけではない（同書、〔第3巻、〕107頁）。それゆえ、子どもをよく見ることがないような父親はひとりとして受け入れられない（〔第3巻、〕81頁）。上述の教育方法によって共通の精神を備えたそれぞれの子どもは、将来どのような運命が期待されるのかによって、すなわち、君主になるのか（第2巻350頁以下〔「250頁」とすべきところを転記ミスしたものと推測される〕、第3巻87頁）、国家の高官となるのか、貴族、役人、富豪、聖職者、知識人、あるいは文人になるのかによって、異なった教育を受けることになるだろう（第3巻87頁以下）。民でさえも忘れられたわけではない。この世紀にいくつかの高等法院に提出された教育計画と同様に、ドルバックによれば「自らの行動に必要な不可欠なだけの知育と徳育をたやすく受け入れる素地があるだろう」（第1巻〔第3巻とすべきところを転記ミスか〕108頁）。個々人の活動や周囲の影響に大きな紙幅を割きつつも、ドルバックは個人の自発性がもたらす結果に目をつぶっていたわけではないし、中央権力の介入が必要であるとも考えていた。「政府だけが実施可能であるような全体的な改革がなされないのであれば、このうえなく文明化された国家のなかでさえ、若者たちは社会の真の利益に適した教育を、長きにわたって受けられないであろう」〔第3巻、96頁〕。さらに、このような改革は、「活動せず、出世を望まず、力もなく、徳もない存在者にしか支配力を及ぼすことを望まない」暴君には期待できない。「したがって、よい習俗にいつそう好ましい、社会の幸福にいつそう適合した、法にかなった教育を国民が期待しうるのは、注意深く情け深い政府であるということ、なんど繰り返してもしすぎるということはない」（教育に関する章〔第3巻、106頁〕）。

この時代にコレージュで与えられていた教育に対して、ドルバックが好意的ではなかったことは、すでに見てとることができよう。「教師にとっては重要なものと思われていた型にはまった行動によって常に導かれた教育は、自然について弱々しい概念ばかりを生徒たちに与えるものでしかない」。生徒が教えられるのは、ほとんど理に叶わない自然学である。ばかばかしい難問を並べ立てた論理学によって、推論への嫌悪感を抱かせる。実社会で生きる定めの人間にふさわし

い道徳的理想ではなく、隠者にふさわしい道徳的理想が提示される。死語〔古典ギリシア語とラテン語〕について稚拙なレベルで習得するという、ほとんど成功したためしのない目的のために、わけのわからない文法についての抽象的な研究を強いられる(82頁以下)。

教育の真の目的はよく生きること、要するに道徳を人間たちに教えることである。「道徳が社会的教育の要石になるべきであろう。教育は、どのような出自の人であろうと、理性、一般的有用性、徳に導くことを引き受けなければならない(…)。そこから有用な教訓を引き出すことができないのであれば、古代史や近現代史のあらゆる事柄を学んだとて、なんの役に立つだろうか(…)。若者たちが古代ローマの不朽の名作から、くだらないものをやたらと飾りたてる技術や、悪徳に魅力を感じることや、作り話をこしらえることではなく、祖国愛、自由、徳を汲み取るようであって欲しい。幼年時代におもちゃで十分に遊んだ国民は、最終的には、教養を身につけ、啓蒙されていることが求められる。精神が探求すべき広大な場を提供するのに、真理が十分に豊かではないなどということがあろうか。社会に生きる人間と自然は、くみつくすことなどできない資源をなしているのではないだろうか(…)。教育はこのようにして、心にとっても精神にとってもしばしば不毛な研究からくみとられる知識などよりも有用な知識で市民の精神を少しずつみだすことができる(…)。公教育が作り出す良き市民の数は極めて少ない。公教育は、祖国のためにも家族のためにもならず、自分自身の生存に必要な賢さすらしない人間たちを作り出す(…)。公教育は、公共の福祉と同様に個人の生活の幸福にも必要不可欠な社会の調和の基礎を与えるものでなければなるまい。教育者は、現状そうであるように、以下のことを教えるのを怠ってはいないだろう。すなわち、生徒たちがいずれはかかわることになる夫婦関係の義務、つまり、父親の役割、主婦の役割、近親者の間にある血縁、友人たちを結びつける絆、最後に主人の義務と使用人の義務についてである」(第3巻92頁ほか随所)。ドルバックは付け加えていう。「公教育は、私たちのまわりの若者たちを、知るべきことについてまったくの無知であるままにしているというのに、若者たちが断じて知らずにいるべき悪徳にかんする知識から若者たちを守ってはいない。子どもの無垢と純潔を保つ役割を担った聖域であるはずのコレージュが、実際には、生涯の安寧に影響を与えかねない有害な習慣⁶⁾に染まらせるのに、大きな役割を果たしているのである」[第3巻、95頁]。

ドルバックが長々と語っている女子教育についてのくぐりや申し分ないものである。ドルバックは、女子教育の重要性を見誤るなどという重大な間違いを犯さなかった。「女性たちのふるまいが、男性たちの習俗に対してこのうえなく顕著な影響を与えることには、いかなる疑いの余地もない。それゆえ、人類のうちより愛らしい半分に最高の教育が与えられるなら、残りの半分にとっても幸せな変化が生じるであろうことに、誰もが納得するにちがいない」[第3巻、103-104頁]と、ドルバックはいう。しかしながら、「妻、母親となることを定められた女性に対する教育については、ほとんどすべての国民において忘れ去られていると思われる」[第3巻、98頁]。ダンス、音楽、裁縫といったものが、女性が勉強する内容のほとんどすべてである。ほんの子どものうちから媚を売ることしか教えない。そんなふうにして女性を「追従を喜びとするような、そして、国に対する義務についてはまったく無知なまま生きるような、偶像」[第3巻、99頁]にしてしまう。かくも空虚で、避けがたい退屈さのためにやっかいなものとなった教育が、いかにして、うわべだけのお世辞にばかり自らの存在の関心を置くように女性たちを導いてしまうの

か、ドルバックは巧みに描いている。

娘たちに与えられる公教育に関していえば、「こうした不都合から娘たちを守ることができるような性質のものではない。娘たちの楽しみ事がやっかいになると、分別のない両親は娘たちを実社会から完全に引き離されているために、そうした楽しみ事についてなにもわかっていない世捨て人たちの手に委ねて、厄介払いする。いったい、生涯独身を貫く運命にある者たちが、いずれは夫婦生活の義務の中に身を置くことになるはずの娘の教育にふさわしいものだろうか。まるで経験がない女性たちが、自分ではまるで知らないはずの誘惑や危険から娘を守ることができるのだろうか。道徳の授業をするにしても、おしなべて迷信的な夢想⁷⁾によって捻じ曲げられたものとなり、たいていは、社会の利益とはまったく無縁な、細々とした宗礼をもって美德とするものになるだろう (…)」〔第3巻、101頁〕。

ドルバックは、こうした不都合の治療薬として、男の子たちのために素描した教育計画と根本的な目的においても手段においても違うところが少しもない計画を提案する。とはいえ、無知であるゆえに、女性の魅力となる境遇についていただく偏見にこだわることはない。「この魅力的な女性は、その人生を通じてあまたの楽しみや喜びをふりまくようにつくられているのだから、その精神を養うことを一切恐れないようにしてもらいたい。有益な知識が女性の優美さを損なうことなどありはしない。女性の心は自然によってこのうえなく社会的な美德を身につけられるようにつくっているのだから、とりわけ女性が心を培うことを心がけてもらいたい (…)」〔第3巻、103頁〕。

こうした願望や忠言を、女子教育についてコンドルセが示した見解や、現代のフランスが国民教育をこの観点から組織するべく払っている努力と、対比してみるのが適切である。

〔ジョルジュ・デュメニル〕

訳注

- 1) 『百科全書』の項目執筆者同定、典拠の確定作業などをふまえた電子版制作をめざす共同研究グループによるウェブサイトでは、署名がある項目が 429、無署名の項目が 209、ドルバックの手になるとされている。ENCORE (Édition Numérique Collaborative et CRitique de l'Encyclopédie ou Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers de Diderot, D'Alembert et Jaucourt) . <http://encore.academie-sciences.fr/encyclopedie/>
- 2) 本項目で参照されている『普遍的道徳』は、ルソーの『不平等論』、『社会契約論』やドルバックの諸著作の版元として著名なアムステルダムのレイ書店が製作した初版本であると推測される。ただし、本項目の出典表記には、本来必要であるはずの巻が指示されていないなど、不備が多数認められる。以下、〔 〕でくくって当該箇所情報を補う。LA / MORALE / UNIVERSELLE. / OU / LES DEVOIRS DE L'HOMME / FONDÉS SUR SA NATURE. / [...] / A AMSTERDAM, / Chez MARC-MICHEL REY, / MDCCLXXVI. 3 volumes in-8°. t.I : 286p. ; t.II : 256p. ; t.III : p.283p. cf. Jerom Vercruyse, *Bibliographie descriptive des imprimés du baron d'Holbach. Dictionnaires et synthèses*, Nouvelle édition revue et augmentée. Paris : Classiques Garnier, 2017, pp.158-159. なお、レイ (Marc-Michel Rey, 1720-80) をめぐる近年の研究動向については、次を

参照。坂倉裕治「〔展覧会評〕 Marc-Michel Rey : Un libraire dans l'Europe des Lumières リヨン、パール・デュー図書館、2018年3月6日～5月26日」『日本18世紀学会年報』第34号、2019年6月、124～125頁。

- 3) 「子曰、「道之以政、齊之以刑、民免而無恥。道之以徳、齊之以禮、有俱且格」（子曰く、之道くに政を以み、之齊ふるに刑を以みば、民免れ而恥は無し。之道くに徳を以み、之齊ふるに禮を以みば、俱有ありて且かつ格し）。『論語』為政篇第二（3）。フランス語の引用文は原文とやや隔たりが認められる。
- 4) 凡例などで明示されているわけではないものの、アスタリスクは参照すべき項目が『事典』に見出しとして立っている語につけられているようである。項目「エルヴェシウス」については次を参照。杉山大幹、辻和希、坂倉裕治「第三共和政下フランスの学校教育プロパガンダにおける啓蒙思想家像（2）——（翻訳・解題）ビューイソン編『教育学・初等教育事典』項目「エルヴェシウス」——」（前掲）。
- 5) ルソー自身、みずからの思想全体を貫く根本原理は、人間の本性そのものに悪はないという主張、「人間の本源的善性」と呼ばれる主張であったと述べている。この主張は、原罪説をはっきりと否定するものであったから、パリ大司教をはじめ、カトリック教会関係者から厳しく断罪された。さしあたり、次を参照。坂倉裕治『ルソーの教育思想』風間書房、1998年、93頁以下。
- 6) 自慰行為を指すものと思われる。18世紀におけるこの問題系については、次を参照。阿尾安泰ほか訳『性 抑圧された領域』、国書刊行会（「18世紀叢書」第6巻）、2011年。
- 7) 18世紀当時、「夢想」（*rêveries*）の語はほとんど狂気と同義語であった。この問題については、さしあたり、次を参照。Robert J. Morrissey, *La rêverie jusuqu'à Rousseau*, Lexington : French Forum Publishers, 1984.

ラ・メトリ オフレ・ド・ラ・メトリは、1709年にサン＝マロで生まれた。医学を学び、オランダのライデンに赴いて有名なブルーハーフェの講義を聴いた。フランスに戻ると、1742年、フランス衛兵隊付きの軍医に任命された。1745年、『靈魂論』を出版した。同書では、至極公然と唯物論に傾倒したため、ラ・メトリは罷免され、地位を失った。ふたたびオランダに赴き、1748年に『人間機械論』を出版した。ラ・メトリが残した最も有名なこの著作のために、オランダからも追放されることになった。ラ・メトリはフリードリヒ大王のもとに逃れた。大王はラ・メトリと親しく接し、ベルリン・アカデミーに招いた。1751年、ラ・メトリはベルリンで没した。この突然の死には、ある種の不摂生が関係していたように思われる¹⁾。

ラ・メトリの思想はかなり過激である。それゆえ、ラ・メトリは、いささか素朴な慎重さから、しばしば自らの思索の筋道を覆い隠している。しかしながら、もしラ・メトリが自らの思想に関して体系的に説明することが許されていたら、どのようになったのか、以下は、それを試みに示そうとするものである。

すでにデカルトは思考と物体という二つの実体を区別していた。あらゆる物質的な現象は、そ

こには生命にかかわる現象も含まれるのだが、機械的なものとみなされていた。ここから「動物機械論」というデカルト主義の理論が生まれる。機械的な身体に対して、精神的本質ないし思考として独自に切り離された部分である魂を結びつけることもありえた。このような場合にのみ、感覚と観念を持つことができるのだがそれは人間にしか起こらないことであった。

ロックが現れ、思考は物質の属性に他ならないかもしれないのだとほのめかした。そうだとすれば、〔身体と思考という〕二つの本質の区別は退けられることになる。この区別がそれ自体として検討されるにせよ、この区別に現実の事実と突き合わせて検証されるにせよ、この区別こそがあまたの困難を引き起こす原因とみなされたのであった。

ロックがほのめかしたことをラ・メトリは基本原理とした。ラ・メトリからすれば、霊的な魂など存在しない。思考は物質が生み出すもの、その属性である。それゆえ、すべてが物質的なものである。デカルトの「機械論的」理解は、人間にも動物にも等しく適用できるものである。だれにも効果を与え得ないであろう婉曲的な修辭的表現をとりぞいてみれば、これが『人間機械論』で示された思想である。

この人間機械、この物質的な自動人形は感覚器官によって統御される。それゆえ、その目的は快楽を感じることである。このようなものが自然にかなった道徳とされるのである。しかし、万人がこれを知り、この原理に従って行動するとしたら、それはよいことではあるまい。そのようなことになったらあらゆる社会が終焉を迎えることになりうるということに気づく程度には、ラ・メトリにも知性があったのである。

それゆえ、当然のことながらこの知識は、ほんの一握りの賢人たちだけの占有物ということになるだろうし、断じてそうでしかありえないのである。こうした賢人たちのためにこそ、『反セネカ、あるいは幸福について』、『快楽』、『エピクロスの体系』、『快楽の技術』を書いたのである。これらの作品においては、幸福が利己主義と混同されており、そのために、道徳の最終的な努力は、ときに性愛的偏執から生じる想像力にあるようにみえる。

大多数の人間たちについていえば、自然本性とは真逆の道徳、恐怖による教訓を支えとする道徳によって導かれなければならない。これは、聖職者や政治家が作った巧みな技であった。

著作を執筆していた時点で、聖職者たちからこの役割をとりあげることがまったく好都合だとラ・メトリは考えていた。諸宗教は分裂や戦争の源泉である。もっぱら哲学的精神が人々を統御することが最善であろう。このような意味で、ラ・メトリは唯物論者たちと無神論者たちからなる社会という仮説を好んで考察していた。そのようにした理由は、社会を再構築するために哲学的理論の力に信頼していたことにはないし、ましてや人間たちに直接働きかける真実や哲学の幸運な影響に信頼していたことにもない。まったく逆の立場である。しかし、哲学はそれを学ぶ者に知的優位性を与えるのであり、この優位性によって、人間機械どもをよりよく導くことができるのだ、と信じていたのである。

かくも度量の狭い見解にラ・メトリがとらわれた原因の一端を、フリードリヒ2世のもとに足繁く通ったことに帰することができよう。真理が人間たちに広く行きわたることは適切ではないという考えを持っていたことから、自身の人柄としても実際に不道徳であったことから、ラ・メトリが教育学にきわだって貴重な貢献をもたらしたなどということとはなからうと分かるはずである。

「教育に関する省察」(『靈魂論』第15章第4話第1節、アムステルダム版、1774年、『哲学著作集』第1巻、218頁)²⁾のなかで、子どもの推論に先んじないこと、生徒の魂の進歩のあとに沿うことを推奨している。すでにモンテーニュが唱えていたこと、つまり、子どもたちに先生のまえを「歩き回らせておけ」ということではないだろうか。受け取った印象を消し去ることができないような年頃の生徒たちに、まちがった観念や意味のない言葉を教えることが一切ないようによく注意しなければならない。「子どもに教育する役割を引き受ける者たちは、至極明白な観念のみを子どもに刻みこみ、光明を覆い隠しうような観念はなにも刻みこまないようにしなければならない。しかし、そのためには、まずもって自らがそのような教育を受けていなければならないのだが、それは実に稀なことである。人は、自らが教えられたように教えるものである。まさにそのために、誤用や誤謬が際限なく増殖してきた。最初の観念に対する先入観は、精神のあらゆる病の源泉である。人々は機械的にこうした病にかかり、それに注意を向けるでもなく、慣れてしまう。そこで、こうした概念が、生まれながらのものであるのだなどと信じるようになるのである」³⁾。ラ・メトリは生得観念説にも闘いを挑んだ。生得観念説は、結果として、教育の役割を消し去るところにすぐさま行き着く。歴史的な、あるいは仮説的な事例をいくつか持ち出して、人間は環境がつくり出すものにほかならず、社会なしでは愚かなままに留まるということをラ・メトリは示している⁴⁾。

これらの教育学的な見解は、ロックの影響のある理論、経験論がこの手段についてだれにでも喚起しえたであろうものを超え出るものではない。我々としては、ラ・メトリを18世紀の偉大な哲学的学派の他の人々と同列に置くことなど、到底できない。

[ジョルジュ・デュメニル]

訳注

- 1) ラ・メトリはプロイセン駐在フランス大使ティルコネル伯爵(François Talbot, comte de Tyrconnel)の邸宅で開催された昼食会の後に亡くなっている。この件について、18世紀フランスの文壇の大御所、ヴォルテールは1751年1月13日付の元帥、リシュリュー公爵宛書簡で次のようにからかっている。「かのラ・メトリ、人間機械、若き医師、頑丈な健康、狂乱の想像力、そのすべてが、トリュフ入り雉パテー羽分をいい気になって丸々食べたため、いま死んだところです。わが英雄よ、これはわが国の完璧な笑劇の一つです」(『ヴォルテール書簡集』高橋安光編訳、法政大学出版局、2008年、442頁)。
- 2) 本項目で参照されている3巻本の『哲学著作集』は、次の版本であると推測される。*ŒUVRES / PHILOSOPHIQUES / DE Mr. DE LA METTRIE. / Nouvelle édition, / corrigée & augmentée. / A Amsterdam, / M. DCC. LXXIV. 3 volumes in-16°. t.I : 282 + 2 p.; t.II : viij+304p. ; t.III : xii+323+ (1) p.* 早稲田大学のコルヴェア文庫に収められた版本を現物確認した(文庫22 3409 1-3)ところ、活字の組版ルール、オーナメント、使用されている用紙の特徴からリヨンで作成された非正規本だと推測される。後日を期して検証したい。
- 3) この引用は、注2で示した版本の219頁からとられたものと思われる。
- 4) デカルトの生得観念説を批判する同趣旨の発言は啓蒙思想家たちによってくりかえされている。その有力なモデルとなったのが、「人間の諸観念の最大の基盤は、その相互の交際(commerce)

にある」とする、1703年に王立科学アカデミーの機関誌に掲載されたフォンネル (Bernard le Bovier de Fontenelle, 1657-1757) による「シャルトルの聾啞者」に関する報告である。この報告は、ビュフォン、コンディヤック、エルヴェシウスなど 18 世紀の多くの著述家たちによってくりかえし引用された。次を参照。坂倉裕治「18 世紀フランスにおける「聾啞者」へのまなざしの思想史的意味」(前掲)、9-10 頁。